

方向

第六九号 一九八七年七月一日 京都市上京区下長者町通千本西入妙得寺内 方向社

南山大師の戒律觀 (一四) 赤谷明海

結論 南山大師戒律觀の特色

戒律に対する南山の思想乃至信仰を一瞥するとき、誰しも感ずる著しい色彩は、先づ「総合的」と言ふ事であらう。この総合的色彩は彼の戒律觀の首尾を一貫する特色であり、それは彼の著述に引用する書目の種類と言ふ形式的事実の上にも表はれ、『事鈔』の序文を一読する事によつても首肯し得られ、更に教判論の組織の上に明瞭に看取し得る所である。彼は諸部律藏を綜合し、大小二乘を綜合し、理事を綜合し、解行を綜合し、一切の善美を綜合して、其処に理想的の思想信仰の殿堂を建立し、社会的には仏在世當時の統一ある綜合集團の確立を計らんとするのである。

先づ諸部律藏に関しては、『事鈔』序に、

「若不鏡覽諸部偏執一隅。涉事事則不周。校文文無可換。遂師心臆見各競是非。互指為迷誠由無教。」（正

・40・c）

とある如く、単に一部派の説に偏して他部を排する事なく、自ら『四分』の他律に優れたるをみとめ（註）、主としてそれに依りながらも常に他律の長を採つてその短を補ひ、あくまで自己の憶見を抑へて教文に遵じ、依憑

とすべき教文の見当たらぬ場合に於いてのみ、理として仏意を判じ以て事を決すると言ふ態度に出でてゐる。斯の如く南山は『四分』を中心根拠とし、他のあらゆる律教律論を綜合し、以て定本とも称すべき律制を確立したのである。

（註）『事鈔』序には「今曇無德部人法有序軌用多方。提誘唯存生善。立教意居顯約」と理論的に四分正依の理由を挙げ、又『業疏』には「神州一統約受並誦四分之文。今所判釈約受明隨故立一部以為宗本」と實際的方面よりその理由を明してゐる。

然も南山、此の確立に際して単に小乗の律教律論に依つたばかりではない。広く大乘の三蔵を研鑽してその形式内容を採り上げ、以て諸部の律制を補足・充足せしむると共に、進んでは大乘の深遠なる思想を以て律制の運用動力たらしめる態度に出で、『事鈔』巻中に『百喻經』を引いて、

「百喻經云。昔有一師畜二弟子。各当一脚隨時按摩。其大弟子。嫌彼小者。便打折其所当之脚。彼又嫌之。又折大者所当之脚。譬今方等学者非於小乘。小乘学者又非方等。故使大聖法典二途兼亡。」（正・三〇・三〇）

と

と言ふ如く、大小共に仏の聖教であり、理として何等の分隔ある訳でないから、行すべき人間の域心を広大ならしめ、両者相依り相資けて自利利他を行じ、以て正法を久住せしむべきであるとし、茲に大小二乗を綜合し、從來小乗教の占有物の如く見られて来た戒律を以て円頓大乘と指摘し、小律即大行、戒律即円乘と決したのである。

彼は一方當時僧風の振作より出発した關係上、日常生活の實際的立場より戒律を重視し、且つ行的觀點に於いて戒律の必要性優越性を認めたのであるが、彼は單に持律者の地位に留まつてゐたのではなく、更に戒律を學的に考究大成し、大小二乘を融合し、戒律を以て大乘と判ずると共に、又律の文相に拘泥株守する事なく、犯戒の大本を域心の大小虚実に求め、心の定慧的修鍊を閑却する事なく、三学並修兼備の必要を説き、※に行と学、行と解、事と理との綜合的態度を示してをり、斯くして南山の綜合的根柢本仏教の樹立が提唱されたのである。

以上南山の綜合的特色を述べる中、彼が法中心的即ち遵法的であり、個人の心情を抑へ、只管聖言の誠量に信順するの傾向が強かつた事。彼が行的即ち実行の實際的であり、律の教条を實際住持行持の上に光顯せしめんとし、理論よりもむしろ実行を重んずる傾向の強かつた事。更に大小俱心の宣言に見られる如く心中心の事であり、大小の區別、輕重の判定等に心の広狭高下を重視した事。従つて大乘人の行ずる四分戒律を以て大乘と判じた事。等の特色をも併せ見たのであるが、是等の特色はすべて綜合的特色の派生的分子にすぎない。

斯の如く彼は諸律・大小等一切の善美を綜合して化制三学に包括し、是等相互間の相依相成による綜合仏教を主唱してゐるものと言ふ事が出来、茲に於いては化制は分立し、三学は並立であるが、斯の如きは言はば南山の總觀とも言ふべき一面があり、之に対し、特に戒律の重要性を強調し、戒学を以て万行の帰嚮とする一面がある。之は前の總觀に対して別觀とも言ふ事が出来よう。一体綜合は單なる集合ではなく、綜合の根柢には全体を統一指導する何等かの原理が無くてはならない。南山の綜合的仏教の中心原理は言ふまでもなく戒律であり、更に限定すれば『四分律』を正依とする円觀的戒律精神である。かかる指導精神は先の總觀的立場に於いては比較的顯

著に表示されてゐないけれども、別觀的立場に於いては明瞭に表明され、戒律を以て綜合仏教を形成する中心の核とし、要とし、首尾を貫く一大幹線とし、茲にあつては戒律は他に対してその優位に立ち、三藏三学を挙げて戒律に攝し、戒律は仏陀教法の真髓を發揮するものとされ、一切の教理行果を包括し尽くすものとせられるのである。

以上の如く南山には綜合の指導原理たる戒律思想の精神を特に別出して強調する面と、一般行法の一として他に併立せしめる面との二方面が見られるのであるが、兩者共にその綜合的思想傾向の結果であり、その戒律觀の特色は一に根本仏教時代を理想とする綜合的態度であると言ふ事が出来よう。

附言

日本戒律史上に於ける南山大師の影響

南山が後代仏教に及ぼせる影響極めて多大である中、特に日本戒律運動に及ぼせる物を纏めて論ずる事が此の附言の目的であるが、残念乍ら日時の関係上、ただ極めて概括的に、戒律運動の盛衰を以て南山影響力の盛衰と目し、日本戒律運動盛衰の資料を雜然と摘記し、以て他日を期する事とする。

奈良時代 伝來と興隆

道瓊・道融・智憬の『事鈔』講説。

鑑真的來朝。天皇御受戒。天下三戒壇の建設。唐招提寺を以て学律の根本道場とす。

鑑真門業の講律弘伝。招提寺・戒壇院を以て弘律の中心地とす。当時官制による戒律興隆。

① 僧尼の受戒は必ず三戒壇に依るべき事

② 僧侶の治罪は僧制に任せたる事

③ 得業考試に戒律二条を必須とせる事

④ 新出家者をして先づ招提にあつて学律せしめたる事

〔当時に於いては戒律即南山律の状勢〕

平安時代 維持より衰微

最澄円頓戒を主張す、円頓戒壇の建立。〔南山一宗の統制破らる〕 当時尚叡山学徒の学律は山上に於いての

み円頓戒、下山の際は南山律に依る。〔南山律尚勢力を維持す〕

中期頃より僧風地に墮ち、学律持律の事更に無し。

末期、実範興律の第一声を挙ぐ。

鎌倉時代 復興と隆昌

貞慶・高弁の律風鼓吹。

覚盛・叡尊・円晴・有叡の自誓受戒〔南京律の復興〕

覚盛による戒律中興とその一統の隆盛

良遍・円照・証玄・禅慧・導御・凝然等〔招提寺・戒壇院〕

叡尊による戒律中興とその一統の隆盛

忍性・信空・幸尊等（西大寺）

俊仍の弘律とその一門の隆盛（北京律の創始）

俊仍・曇照・真照等の入宋（南山律の再伝）

吉野・室町時代 維持より衰微

徳川時代 復興と隆昌と萎微沈滞

明忍・慧雲・有尊の自誓受戒（南山律の復興）

四分律三僧坊の出現（正依南山）

槇尾派（明忍・良永）、大鳥派（円忍）、野中寺派（慧猛）

浄戯、如法真言律を創唱す（靈雲寺派）（正依真言・傍依南山）

天台僧戒山の四分研究（此の頃諸宗に亘つて律風尊重の風を生ず）

忍徴・敬首・靈潭の浄土律唱導

慈空の西山浄土律鼓吹

元政による法華律の創唱、道白の禪戒興隆

妙立・靈空の安楽律創始（円頓戒に対する南山律の圧倒 当時各宗派により戒律復興の事がなされたが、その

戒律は依然『四分』が中心であり、南山律が指標であった）

招提寺・泉涌寺系律学の復興

普寂の興律（南山律・真言律・安樂律・浄土律の兼学）

慈雲の正法律創始（諸律綜合的・南山律を中核とす）

有部律の主張始る（真言宗内に於ける有部・南山対立）密門・学如・等空の三派（南山の嚴より有部の寛に就く）（四分興隆に対する反動）

幕末仏教衰運の期に至り、戒学も衰微に就く。

明治時代 衰微と混乱

明治五年太政官達「自今僧侶肉食妻帯蓄髮等可為勝手事云々」の影響

招提・西大・泉涌の三寺系独立停止（南山律本拠消滅）

槇尾・野中・如法真言律各派は真言宗所轄となり大鳥派は廃絶す（南山系真言律各派の解消）

安樂系慧澄の弟子照暹、独り南山律を代表して有部律の雲照に対す。

明治末年西大寺・招提寺各々独立す。

泉涌・槇尾等戒伝滅失。

孤山 雁 信

— 赤谷明海書翰集 — (一三)

原田憲雄編

★1951.2.2. 原田憲雄宛。葉書。宛先、京都大学病院整形外科病棟。『幻の葡萄』171429.

★1952.7.26. 同宛手紙。封筒のみ墨書。宛先妙徳寺。差出し住所、唐招提寺。

大交御無沙汰しています、その後身体の調子は如何ですか、出張にしても内勤にしても都会の騒音と風通しの悪さと照り返し等から逃れる術もなからうこととてさぞかし消耗していることだろうと案じています、小生の方移転当初のような快調とまではいきませんが左程夏やせもせず比較的元気です、やつと寺務所の各部屋に出ている書類の整理を終わった程度、まだ内蔵の片づけが残っています、それがすめば戒学院ですがぐずぐずしているうちに秋になるかもしれません、古瓦の本を読んだりして少しづつ唐招提寺の美術に近づこうとやっていますがなかなかです、一そのことこんなものは捨てて早く寺史資料の蒐集にかかろうかとも思っています、

いつかお尋ねいただいた唐招提寺展は東京朝日の企画部長と面談し、十一月松阪屋で開催しよう大体の話合は出来、入場料の徴収等此方の思っていた通りに納得してくれましたが、その後具体的にはまだ話が進みません東大寺は八月二日から三週間高島屋でやることになりましたので、一番心配していた東大寺と張り合わないかという心配は解消しました、

この展覧会が最終的に決ったという訳ではないのに庫裡（特に台所）の修理の計画が先に走り出し、八月末頃から愈々着工するようになりました、貧乏普請で何時出来上るとも判りませんが手持の資金とにらみ合せて、そろそろ進めてゆきます、客殿もすっかり出来上るまでは四、五年はかかるでしょう、

県庁や関係会社等をよく訪ねますが、唐招提寺のバックも個人的な地盤の欠如といえますか、出てきたての面識のない男では左程効果のない事を知らされています、特に大阪の営利会社などはでな行事や金と縁のない当山など問題にしてくれませんが、勿論バックに頼っている此方が悪いのですから余り文句もいえません、村方にし

でも同じです、矢張りコツコツと何年もかかって積み上げた地盤がなければ新参の吾々の言い分なんか問題にならないようです、

花園にいた時分は時間的な余裕のなさや経済的な方面の苦しさを味わってききましたが、何もかも自分の意志通りに動かせる気安さに恵まれていたようです、此方に来るとすべては委されたようなもの、住職ではないのですから、一面仕事のし易い点もありますが、他面思うに委せない点も出てきます、展覧会場で売る品物の件につき××と先づ大きい衝突をしてしまいました、自分の意見が通らないという不満ではなく異見の調整をしようとする次の段階の努力がへをへ取り上げてくれない不満に、将来を暗く見るような自分を意識しています、寺と心中するような気持でやって来たのですが、一寸したこんなことでぐらつくような事ではと自分を責めていますが、感情的なものとはなかなかぬけきりません、以前外から帰って来て門内に入ったとたん寺の空気の暗さに悩まされ何とかぬけ出ようとして応召という合法的な手段の与えられるのを待っていた事がありました、不満がこうじて再びこのようなシメツポイ気分になることはないかと危※しています、太い神経がなく辛抱心に乏しく、ただ感情的な面でピクピク筋を立てている己の小ささ故の危懼とは知りながら、そんな事に拘泥している自分です、先日岐阜のMが泊って行きました、もうY本出版はやめているようですが、その生活態度には何の変わりもないようです、二、三日前に竹内不成が来てこれも一晩泊りました、此方へ来る途中磯長の御廟に参拝し、その夜泊った当寺僧坊の本尊が聖徳太子であったためにその御縁の奇特さに心から感激していたようです、小生よりは確かに純粹に出来ています、聖徳太子の像を鎌倉時代だと説明した小生を非難しましたが確かに説明した方がいけ

なかったのです。此方へ来てから中外日報を読んでいます。この新聞を貫いている一線は確かに竹内のようなものの感じ方、受けとり方であろうと思います。仏像を展観して寺院を経営しなければならぬ邪道を何かと口実をもうけてごまかそうとする小生などには中外の論調は耳にいたいです。

時には京都へ出るのですがすぐ戻ってきます。又ゆっくり御邪魔したく思っていますが何時になるやら。篤さんへ宮崎篤三郎へや杉田へ莊作へ君とも音信せずにはいますが会われたらよろしく伝えて下さい。所用で外出することはよくありますが日曜日は必ずいるようにしていますから千美さんや亜土ちゃんをつれてお越し下さい。七月二十六日 赤谷明海 原田憲雄様

へ赤谷君は、このとし四月一日唐招提寺執事兼律宗宗務所執事を命ぜられ本山に移った。『平安学園と私』一七九頁以下にその事情をのべる。手紙の文中の××とMとは編者の考えで伏せた。

★1952.9.3. 同宛。葉書。一部を『幻の葡萄』V 1487. に載せるが、ここに全文を掲げる。

執拗な残暑もどうやらおしまいの様子、有難い季節に入って来ました、この間は泊めていただき身体の事で心配をおかけしてすみませんでした、齒の方は案じた程の事もなくすきましたが、下痢で消耗してしまいました、二十日に東上して二十四日に帰り、二十八日又行って三十日に戻り、両回とも腹具合が悪かったので、いまだにもとの元気がとりもどせないでいます、展覧会については大分屈折がありました末、来年二月、朝日へ新聞社へ主催で上野の松阪屋でやることに決まりました、当座の問題は保護委の内規である「破防法」(移転不許可品目を決めたもの)を無視して進もうとする此方と、それを楯にとる当局との対立をどうするかということ、事務局

長と大口論をして感情的にもぬきさしならぬところへ到りついてしまったので、大分むづかしいことになりそうです。結局第三者の方から鼻薬の特効薬で処置するような事になるのでしよう、閑適の日暮らしを願う気持ちが切です、そのためではありませんが、先日、杉田君の来訪で話が進み、愈々近く笹瀬へ悦子さんのお母さんにお茶を習うことになりました、毎火曜日の上洛します。

★1952.10.2.同宛。手紙。『幻の葡萄』に一部を載せたが、ここに全文を掲げる。

御無沙汰しています、夏の疲れは秋口に出るとか、お交りはありませんか、小生の方、案外元気です、大分夏には無理したので秋を心配していたのですが、この調子では無事に過ぎるでしょう、

東京でのへ唐招提寺展のへ話の模様などお知らせかたがた一度お邪魔したいと思っておりますが、京都は寄るところが多く、つい道草をくってのびのびになっています、然しそのうちお邪魔します、但しこの月は予定の上ではものすごく多忙です、お茶の稽古で毎週火曜の晚上洛することになっており、今後忙しくても欠かさず行く積りですが、その晩中に戻らねばならない日が多かろうと思ひます、

台所の工事が大分進み、四日には上棟式をやりませう、十一月中には住めるようになるかと楽しみにしています、一度見に来て下さい、萩の花は散ってしまいました、秋ならば何時でも見甲斐はあろうと思ひます、新しいフトンを五、六人分は用意してあります、戒学院を宿泊施設にする第一歩です、

今戒学院に居を構えています、旧法弟へ坂東へ正範の家族を一時引受けているので、急ににぎやかになります、夜だけは僧房に逃げています、正範の妻君が京都新聞に勤めたので本人も子供をつれて此方へ来た訳です、

この本人が「都出版」に勤めないかと話があつて岡田氏とかに会つてきたそうですが、この社について、都新聞との関係とか経理内容のたしかさとか、参考になること御存じでしたら教えて下さい、東京での事業に失敗した本人のことですから、目下どんな所でも文句は云えないのですが、あわててあんまりな所へ行くのも考えものですから。

右お願ひします、十月二日夜 赤谷明海 原田兄

★1952.11.27. 同宛。葉書。墨書。

昨夜は失礼、正範から履歴書を送ると思ひますからその節はよろしく。帰寧の途次、文芸春秋のオール読物を買いました。井上靖の「あすなろ物語」の題に惹かれてです、あすなろの名に含まれる悲しみを矢張り同じく感じてくれた人のあるのを喜び、且つその内容がその名を汚していないのに安堵しました、つまらぬことを書かれたのではあすなろにつながる一人として抗議でも申込まねばなりませんからね、小生まだあすなろにはたまらなく未憐へ練へをもっています。又復活をみたいものです。懇談会のような形で如何でしょうか、不一

へ『あすなろ』は戦後、赤谷明海・杉田莊作・谷口清隆・宮崎篤三郎・森田曠平・原田憲雄で出していた文学回覧雑誌。四、五冊は出たと思うがそれきりになった。題名は赤谷君の案だった。この手紙がきっかけで、またあすなろの会をやろう、ということにはなつたが、みなそれぞれに忙しく、雑誌は出なかつた。

★1953.1.1. 同宛。「恭賀新年」の印を押した年賀の葉書。墨書。

四日は東京展観品の荷造りで出られません、そのうち折をみて御目にかかります（四日は、あすなろの例会）

★1953.9.30.同宛。葉書。『幻の葡萄』V 1502.

★1953.10.2.同宛。葉書。

本日来ていただいたのに不在にして失礼しました。どうも残念です。写真物出版の事で原稿催促に廻っていたのですが、誰か来ているような気がして電話したときは既におそすぎました。明日は大阪と八尾行。明後日は生駒行、その次は西大寺の光明真言、このようにして毎日が過ぎ去ってゆきます、半年近くさがしていた書記が見つかからぬままにとうとう女の事務員で間に合すことにしました。

「方向」なかなか実のあるもの、兄等の黙々と築いてこられたものを見せられ、僕はブ然と己をながめています（九日、十日のうちいずれかにお寄り出来るでしょう）十月二日夜

（この日、急に思い立って家族を伴い唐招提寺に赤谷君を訪うたが不在だった。『幻の葡萄』V 1502.に事情を記す。雑誌『方向』は、中新敷と原田憲雄を同人としてこの年三月創刊した。中新は兼好法師の『徒然草』を、原田は中国の詩人李賀をテーマにして書きはじめていた）

★1953.12.23.同宛。葉書。

先日は失礼しました

さて年末多忙の際かえって御迷惑かと存じますが、久々にて、ゆっくりと話し合いたく、来る二十六日午後五時半頃、河原町四条下る桃園亭までお越し下さい（御家族御同伴にて）もし御都合悪ければ御返事下さい

（二十六日、赤谷君の招待で中華料理のご馳走になった。赤谷君の方は、妹の幸代さん、貴美子さんが、原田の

方は千美と子供の亜土、恭仁子がいっしょだった。小さな子供がむずかたりして落ち着かなかったようだ。

★1954.1.4. 同宛。葉書。

旧臘は久しぶりにゆっくりとお会い出来、何等話には花は咲かなかったもの。うれしい一時でした。年賀状は欠礼しましたが気嫌よく年を越された事と存じます。時に相済まぬ次第ですが貴美子の就職御世話の件は取消していただきとうございます。周囲からのいろいろな声に心を動かされたらしく、ことわって参りました。いろいろ奔走していただいた挙句にこんな事申しにくいですが何率御寛容下さい、明日名古屋へ行き、その足で東京に出て十一、二日頃帰って参りますが、帰れば御伺いして委しくお話しします。とりあえず御知らせして御了承を乞う次第です。一月四日

★1954.1.22. 同宛。手紙。封筒のみ墨書。

先日は御伺いしながらあたふたと立戻り失礼しました。その節貴美子の縁談についてお尋ねをいただきましたが田舎で母親や本人の意向をただしましたところまだ早い（母親は主として準備不足の理由で）との結論になりましたので折角ですがおことわり下さい。小生も何となく今から縁づけること可愛そうに思えてなりません。

次に就職の事については先日も申し上げた通り積極的に御斡旋下されなくても結構。「もし良い口があれば……」といった程度で御取計下さい、これは貴公に一たんことわったために又願うことは心苦しいという理由ではなく、本人の気持が諸方の意見に動かされて、京都へ行きたくもあり、更に一年位現職に留りたくもあつた。決しかねる気持から態度決定をその時の成り行きに任す、もし三月の年度末までに京都に口があれば行こう。な

ければ此方にいるのもよいと云う状態だからです、小生としては都会の生活にも触れさし、広い世界を見させた
くは思います。強力にすすめることが、あとあとの責任を押しつけられるようで煩らわしく、薄情なようです
が、不即不離的なすすめ方をしたいと思っています、此方がこんな事では、固苦しく考えれば君の立場が更にむ
つかしい事とは思いますが、心の一端に留めておいていただき、こんな環境こんな条件ならば本人のためにもよ
ろしかろうという話にぶつかったとき御世話いただければ誠に結構です、大変な難題のようですが、云いかえれ
ば気軽な斡旋を願いたいということ、御心配御無用に願います

小生奈良に移転してかれこれ二年、この頃つくづく思うのですが、今までの生涯中この二年程、外見はよく見
えて中味の空っぽな生活はなかったと思います、そして今後これを何とか味のあるものにしなければと我が身を
せめるのですが、どうも決心がつきかね、又決心だけではどうにもならないようなやこしい状態になっていま
す、自分で自分を判じかねるもやもやの中でジタバタしているだけです、思想的に行きづまった等とは全然関係
もない行きづまりのようです。中学生の頃から三太郎式の「生活の中心」をたとえ概念的にでも持ちつづけて来
たようであり、何等かの目標に眼をつけていたように思いますが、今ではそんな事もなく、時に「死」の誘惑を
受けることがあります、こんなことは以前には全然なかったことです、己に対する自信と不信との相反する力に
引きさかれる自滅の傾向でしょうか、例えば自分達の属する社会——既成宗団の無力、腐敗を痛罵する声に接し
たとする、以前ならばその声の正しい事を認め、自ら管うち、それがために何がしかの努力をしようと張り切れ
た、今ではそんな緊張は出来ず、しかもその声の正当であることを認めざるを得ない、結局自分の愚かさ、あわ

れさ、無力さを意識し、これではいけない何とかしなければと一往もがこうとするのだが、夢の中で力を出そうとしているようにもならない、そして得体のしれないアセリだけが残る、まあこんな次第です、神経衰弱的傾向と自ら判断しようとするのですが、どうもそれだけでは割り切れません。こんなややこしい精神状態で二年間を過ごし、主観的には十年程年とった感じがします。一年程前、寺を出ようとしてブツブツ云っていたのもこうした気分からのがれようとしてのこと、それから一年後の今になっても、さっぱり行手が明るくなりません。まあつまらぬ愚痴を並べたてましたが、これもそう気にかけないで下さい。一月二十二日夜 明海 原田憲雄様

二二 題

噺

1987.6.10.

原 田 慶

戦後の一時期ラジオの寄席番組で、三題噺というのをよく聞いた。聴衆の中から一人一題ずつ出してもらおう。「はいそれ頂きましたよう。」などと言いながら三題を採用して、噺家がその題をまとめて、その場でおとし噺にするのである。

これは、一八〇四年（文化元年）六月に、三笑亭可楽という噺家が、弁慶、キツネ、辻君という兼題で即席にまとめて口演したのがはじまりだという。その三題噺がどんなものだったのかを知らないが、弁慶といえば、三井寺の鐘、五条大橋、牛若丸、白い頭巾の大男、とにかく強くてなかなか人気のある、さまざまな伝説の持ち主である。キツネはずるくてかしくくて、化ける話に事欠かない、辻君は夕暮れ、橋のたもとなどと私の貧しい連想

からも、やっぱりおもしろい噺ができたのではないかと思われる。戦後のラジオ寄席でも、司会者が題を選択していたから、内容のあるものを探っていたのだろうと考えられる。いずれにしても、観客を参加させることによつて、興味をつなぎとめるという方法は、いつか本質からはずれて興味本位なものに傾いてしまうものだから、可楽という人も、文化の末年には三題噺をすてて、純粹の「おとし噺」の口演に専念したということである。

おとし噺にはおもしろい「おち」や「さげ」というものがないといけないし、それがきまつてこそおとし噺なのであるが、ラジオで、寄席をきくより以前、小学生の頃に修養全集で、江戸小咄や落語を読んだ。敗戦直後、何の娯楽もなかった時だから、修養全集がみんなばらばらにこわれるまで読んだ。

その中で今でもだいたい筋をおぼえているのが、「うまや火事」「三方一両の損」「芝浜の財布」の三つであるが、「うまや火事」では、孔子が家で火事があった時に、家財よりも使用人の身の安否を気づかったという話を聞いた女房が、自分も亭主の気持をためそうとして、亭主の大事にしていた瀬戸物を無理に割ってしまった。瀬戸物ばかり気づかうような亭主なら、なまくらなばかりでなく、愛情もないのだから別れてしまおうというわけである。ところが亭主は「瀬戸物はかまわないが、おまえはけがをしなかったか。」とたずねる。女房は、そんなに私のことを思ってくれているのかと大喜びをするのだが、亭主は「おまえがけがをしたら、明日から遊んで酒が飲んでいられなくなる。」とつい本音を言ってしまう。髪結いの亭主の話である。「三方一両の損」は大岡裁きの一つで、たしか、三両をひろった二人の男が、どちらも自分の物だとゆずらない。そこで裁きにあたった大岡越前の守が、自分の一両を足して四両にし、二人に二両ずつ分けてやる、三人とも一両の損をしたことに

なる、というような話だったと思う。仲なおりに食事をさせてやろうと言って、二人を膳につかせ、「あまり多くは食すなよ。」と越前、「たんとは食わないほんのえちぜん。」というさげになる。この「ほんのえちぜん」が子どもにはおもしろくて仕方がなかった。「芝浜の財布」は現在も口演されるものようである。

落語というものは、読むよりも噺家のはなしを聞くところにおもしろみのあるものだろうけれどほんとうに好きでない人には退屈なものである。最近、人気のある頭をつるつるした噺家は、そのあたりをよく研究している勉強家だと聞く。テレビで見たところでは、声がひそひそして、からだや表情が動きすぎて、なんとなくせわしく、私は聞いていて落ち着かない。

京都会馆では市民寄席というのがあって、市バスの中で広告を見かけることがある。七条堀川の興正会館や京極の方の寺でも、若手の落語会がよく開かれていると聞く、出かけてまで聞こうと思ったことはないが、どこかで人々が熱心に研究し、活動していると思うと私は安心していられる。安心してクルミの枝の、風に揺れているのをぼんやりと眺めていられる。

三題噺などということは何故思い出したかと言うと、五月のはじめ、庭の木々にホースで水をかけていると、古い桧の枝にいた一羽のハトが、たいへん気がかりなように私を見ている。その様子がふつうでないので気をつけてみると、そのハトは私を見たり、すぐ近くのモクセイの繁みを見たりする。モクセイの木をのぞいてみると卵を抱いているらしいハトが繁みの中にあるのである。巣を造っている時に全く気がつかなかった。もうこうなったら協力するしかないと思ってネコなどが近づかないように気を配り、何をすることもハトをおどろかさな

うにそつとしていた。そのまま五月も終わりに近くなつた頃、ハトの巢の下の方にテニスのボールのような、丸いものがころがつている。よく見ると枝にぶらさがっていて、どうもスズメバチの巢ではないかと思われた。以前天井裏に、サッカーボールほどのスズメバチの巢が見つかったことがある。ハトに近寄らないように、そつとしていたので、ハチが巢を造りはじめているらしい。誰かが知らずに近寄るとあぶないので、ハチが活動をやめる夕刻を見はからつて、巢に殺虫剤をかけた。びっくりしたハチが飛び出してどこかへ飛び去つた。やはりあぶないと思つて、主人にスズメバチが巢を造つているが、上の方にハトが卵を抱いているので、ひながかえつて巣立ちしてしまうまで、そつとしておきたいと知らせた。どれどれと主人がハトの巢とハチの巢をのぞいて、なるほどと空を見上げたら、ハトの巢のすぐ傍のサトザクラの枝にオビカレハが天幕を張つて葉を網にしていることに気がついた。人間が手を入れずにそつとしているわずかな空間に、生きものたちが安住の地を求めているようであつた。とにかくハトの巣立ちを待つことにして、そのままにしておいたが、五月の末にハトのひながかえり、六月の五日、ちょうど私の見ている前で二羽が続いて巣立つて行つた。ツバメとちがつてハトのひなは一声も音をたてず、黙つてすうつと飛んで門をくぐつて外へ出て行つた。しばらくからつぱの巢の前に立っていたがひなは帰つて来なかつた。なんとなくながつかりした気分だったが、翌朝ひなは二羽とも庭に帰つていた。うずらのような、まだかなり小柄なハトのひなは、いつも二羽いっしょに、庭のどこかで遊んでいる。

ハトが巣立ちするとさつそく、主人はスズメバチの巢をモクセイの枝ごと折り取つて持ってきてくれた。うすく乾いたカステラの皮でできたテニスボールのような物の中に、ふつうのハチの巢が入っている。サクラの枝も

切ってオビカレハはとってしまったという。後にはモクセイの木のまわりにホタルブクロやテッポウユリが白い花をゆすっていた。ハトとスズメバチとオビカレハと、これではおもしろいおちもないし、三題噺にはならなかった。三つの生きものが巣を造ったというだけのことである。これは三題噺というよりも、川風が吹くと桶屋がもうかるの類だろうかなどと、私はまだ懲りずに考えている。

キ　ク　ラ　ゲ

ハトが巣立ちして二日ほど後に、気象庁からの発表が、「梅雨に入ったと思われませう」という梅雨入り宣言の言まわしに、今年から変わったのだということ、とにかく大降りした。そして、からっと晴れた朝、門の外の塀の際に、大きなネコが死んでいた。外傷は見えないが、雨でぐっしりぬれて、重たそうだ。どうして処理しようかと、スコップを持ち出したり、他に何かよい方法はないかと、物置を見渡したりして思案していた。私がぐずぐずしていると、主人が手ぶくろをはめて、大きなポリ容器を持ってきて、ネコをつかまえるとよいしょとその中へ入れた。ネコには外傷は全くなく、上を向けられた途端に、鼻から泡をぶくんと一つ出し、それは小さな音をたててパチンとわれた。

いつも道路には塀にそって、自動車や路上駐車車の行列をしているので、ネコは車のかげになって、私は気づかなかつたけれど、近所の人の話では、昨日から死んでいたということである。「保健所へ電話しようというてた

とこでした、ちゃんとかたづけけてもろておおきに。」と皆ほっとしたらしい。主人は墓地の隅に穴を掘って埋めてくれたので、その後大きな水色の容器を、私はたわしでごしごしと洗った。

それからしばらくして、墓地の掃除をしていた主人が、不思議なものをひとかかえほど持って来て、キクラゲだという。冷めたくてずしんと重くて、べろべろとこんにゃくのように、またまた寒くなる思いがしたが、主人は、團伊玖磨さんのルパイプのけむりの中に書いてあったから、確かにキクラゲだ、まずぼくが食べてみる、と確信あり気に言う。それほど言うのならとざるに入れ、ふきんでこすってきれいに洗い、水気をふいてひとまず廉の上に干しておいた。友達が買ってきてくれた乾したキクラゲがあるので、取り出してくらべてみた。乾いたものと生のものとは、ずいぶん違うのでよくわからない。凶鑑を見て虫めがねで見た。確信は持てないが、どうもキクラゲらしい。主人のあの様子では何といっても食べるつもりだろう、それなら先に私が食べてみようか、私の方が丈夫にきまっているのだから。さてその気になってみると、いや待てよ、同じだけ食べても私の方が太るといふことは、私の方が腸の吸収がよいということだから、毒だって私の方がよく吸収する。困ったなあと考えた揚句、いっそみんなで食べようとかってに決めた。

スパゲティのミートソースの中へ、きざんで交ぜた。さすがに娘の皿にはほんのしるしだけしか入れなかったけれど、主人と私とは同じだけ食べた。「これが例のキクラゲですよ。」と言うと、満足気に「おいしいな」と食べている。夜十一時頃まで、おなかはずいぶん大きくなる、このぶんなら大丈夫だろうと思って寝てしまった。翌朝皆の顔がそろそろまで気にしていたが、テーブルに来て二人とも何も言わない。もうすっかり忘れているら

しい、むしろ初めから気にもしていなかったようである。キクラゲだと思い決めたらもう、すっかりその気になつていたので。「あらなんともなやきのうはすぎて」私はひとりおなかの中で笑つていた。大きくてみごとなきクラゲは、からからに干し上がつて大切に保存している。

ものいえば

法華經巡礼 1

1987.6.30.

原田憲雄

口を開いて法華を誦じ、口を閉じて法華を誦す。法華法華、如何が讚せん、焼香合掌して曰く、南無妙法華。これは良寛和尚が『法華經』を歌つた「法華讚」という連作詩の「開口」と題する第一首。その初二句は柳田聖山氏の訳によれば「ものいえば、そなたの悪口、ものいわねば、さらに悪口。」である。悪口というものは、まったく疎遠なものに対しては言わないものであろう。悪口をいうほどの縁でも結ばれたら、縁が軋じて讚めたたえるようになるかもしれぬ。

わたしが生れた処では朝夕『法華經』を唱えた。そこで育ち、みずからも『法華經』を唱えてきた。「論語読みの：」という言葉があるが、かえりみて「法華知らず」というほかはない。恥ずかしいことだ。わたしの唱え馴れたのはクマラジーヴァが漢訳した『妙法蓮華經』である。1960年前後に本田義英博士から梵文『法華經』をよむことの大切さを教えられ、榊亮二郎『梵語学』を手に入れはしたが、名詞の格変化を呑み込むほども行かずにやめた。『法華經』を読むから聞きにこいと、親切な小島文保氏から誘われた時には差支えがあった。やっ

とさきごろ独習で梵語を学び『楞伽經』の初めの方だけ辛うじて読んだ。『法華經』は大部の經典である。息のある間に読み通せるとも思えないが、やめずに歩けばそれだけは前に進むわけだ。

『法華經』はテキストが多い。さいわい『梵文法華經写本集成』一二巻が完成し、そのローマ字本も出はじめた。翻訳は漢・和・英・仏などあまたある。すぐれた学者の翻訳、信篤い人の講義、それを読めばいいようなものだが、自分でじかに読むのはまた別の意味があることは、わたしにいくらかの体験があり、そこで見出した喜びに似たもの、あるいはそれ以上のものを、これから味わえるかもしれぬ。もつとも、若いころの感受性はなくなつた。そんな期待はせぬ方がよいかもしれぬ。巡礼。そう思えばよい。急ぐことはない。気に掛かることは、道草くつてもときほぐしてゆきたい。これも思うほどのことがやれるかどうかは、歩くうちに決ってくるはず。

ここでのテキストは、さきに挙げた『梵文法華經写本集成』で、以下これを『集成』と略称する。『集成』は中村瑞隆氏を会長とする梵文法華經刊行会から刊行され、第一巻は1977.12.8.第一二巻は1982.12.8.その『ローマ字本』第一巻は1986.9.12.発行である。『集成』は梵文のテキストはもとより漢訳の「妙法蓮華經」「正法華經」も『大正新脩大藏經』から複写して載せ、ビュルヌフ仏訳、ケルン英訳、南条・岡・岩本・松涛・河口氏の和訳との対照表もそなえる。『法華經』のテキストとして最も完備したものである。ここでは『集成』のうちケルン・南条本(三)を中心とし、他の梵本を参照して拙訳を作り、漢訳と対照しつつ注釈してゆくことにする。『集成』に収める諸テキスト相互の関係や価値等については『集成』みずからが適切に解説する。『法華經』そのものについてはアーガールジュナ(竜樹)「大智度論」ヴァスバンドウ(世親)「法華經論」をはじめ、中国

日本の先進の尊い作業がうずだかい。すでに目に触れたものも、まだ見ぬものも、読みなおし、味わいたい。いちいちはその場所に触れることにしよう。しょっちゅう出てくる言葉は略称せねばならぬが、今さしあたって掲げなければならぬのは次のものである。(一)内は略称。

(妙)又は(妙法華) 妙法蓮華經 (研究) 平楽寺刊 法華經研究(一、10)

(正)又は(正法華) 正法華經 (望月) 望月信亨 望月仏教大辞典

(正藏) 大正新脩大藏經 (中村) 中村 元 仏教語大辞典

(続藏) 大日本統藏經 (思想) 横超慧日 法華思想

(南伝) 南伝大藏經 (布施) 布施浩岳 法華經成立史

昨日(1987.6.29.)柳田聖山氏が新著『大乘仏典 中国・日本篇 第26巻 一休・良寛』を惠投された。一休は「狂雲集」、良寛は「良寛道人遺稿」、いずれも漢詩集である。僧とはいえその詩集を「仏典」と呼ぶのは大胆なようだが、既に統藏に中国の僧の詩集がたくさん入っている。作者の出家・在家も拘わる必要はなく、宮沢頭治の童話をこのシリーズに加えてもおかしくはない。

ともあれ、『法華經』を読み返すはじめの日に贈られた「仏典」の良寛の詩集が「法華讚」から展開されるのは奇縁というほかはない。氏はこれまでもたえずわたしを励まし援助された。応えるほどの作業のないのが恥かしいが、日暮れて遠路に向かう微志を感謝のしるしとしたい。